様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 ３０ 日現在

機関番号：３２３０３
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2022～2023
課題番号：２２Ｋ２０２８１

研究課題名（和文）中学生における学級風土の形成過程の検討-攻撃行動と向社会的行動に着目して-

研究課題名（英文）Prosocial and Aggressive Behavior in Classroom

研究代表者
唐　音啓（Tang, Yinqi）

共愛学園前橋国際大学・国際社会学部・助教

研究者番号：４０９６５４３０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では，中学生を対象に，学級でみられる日々の振る舞いとしての行動特性である攻撃行動と向社会的行動を用いて，学級内地位の異なる側面である認識的な人気とソシオメトリック人気を捉えること，それぞれの人気がいじめや学級風土とどのような関連を持つかをを短期縦断的に検討することを目的とした。その結果，攻撃行動と向社会的行動の組み合わせによって認識的な人気とソシオメトリック人気を捉えられる可能性，認識された人気を持つ生徒たちが学級内におけるいじめの実態を最も把握している可能性が示唆されたほか，学級でみられる向社会的行動がその後のポジティブな学級風土に影響する可能性が示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究の学術的意義として（１）学級内地位を個人の行動特性である攻撃行動と向社会的行動によって測定できること示し，今後の研究の可能性を提示したこと，（２）学級内地位が学級内におけるいじめおよび肯定的な学級風土と関連することを示し，その重要性を実証的に明らかにしたことが挙げられる。また，本研究の社会定意義としては，生徒自身が持つ行動特性の側面が学級に与えうる影響を明らかにし，学級経営への示唆を示した点が挙げられる。

研究成果の概要（英文）：The different aspects of in-class status were examined in this study. Perceived popularity and sociometric popularity were measured using the behavioral traits of aggressive and prosocial behaviors as daily classroom behaviors among junior high school students. The purpose of this study was to examine how each type of popularity is related to bullying and classroom climate on a short-term longitudinal basis. The results suggested that the combination of aggressive and prosocial behaviors may capture both perceived and sociometric popularity, that students with perceived popularity are aware of most bullying in the classroom, and that prosocial behaviors observed in the classroom influence subsequent positive classroom climate.

研究分野：教育心理学

キーワード：攻撃行動　向社会的行動　学級風土

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

学級内で生じるいじめの温床として，学級内地位への言及がなされて以降（森口，2007），「スクールカースト」や「クラス内ステイタス」といった用語を主として，学級内地位といじめに関する実証的な検討がなされるようになってきた。学級内地位の高さは，学級集団の個性（伊藤，1997）と定義される学級風土にも影響を与えうると考えられ，その認識は中学生において最も高まるとされている（石田，2017）。例えば作田（2016）は，スクールカーストへの認識が高い中学生ほどいじめをする経験が高くなることを明らかにしている。一方で，水野・加藤・太田（2019）では，中学生を対象とした大規模な質問紙調査において，スクールカーストといじめとの関連が非常に小さなものであったことから，これまで方々で指摘されてきた，スクールカーストといじめとの関連は認められないと主張している。このように，学級内地位といじめとの関連については，一貫した知見は未だ得られていない背景には，国内における学級内地位の概念が整理されないまま，研究が進められている現状があると考えられる。

学級内地位の概念は欧米において，学級や周囲に影響を与える人気（Popularity）として知見が蓄積されており，「認識された人気（Perceived Popularity）」と「ソシオメトリック人気（Social Popularity）」に弁別されて検討がなされている（水野・唐，2019）。「認識された人気」は，周囲から「目立っていること，中心性を持つこと，かっこよいことを反映する概念」反映しており，他者に対するいじめ加害行為や，攻撃行動と正の関連を示すという一貫した知見が得られている（e.g., Caravita & Cillessen, 2012）。また，「ソシオメトリック人気」は，周囲から「好感を持たれ，仲間から受容されていることを反映する概念」を反映しており，向社会的行動の多さ（Warden & MacKinnon, 2003）などと関連することが明らかになっている。

このように，これまで欧米にて多く議論されてきた，認識的な人気とソシオメトリック人気の 2 つの概念は，周囲に影響を与える生徒の存在をあらわすものであり，学級にもたらす影響の種類と捉えることができる。しかしながら国内においては，「私の仲良しグループはクラスの中で人気だと思う」といった直接的に人気を問う項目や，シナリオ文からの選択等で検討されている現状にある。また，これまで検討が多くなされてきた中学生という学校段階は，自己概念の発達時期であり，周囲からの認知的な評価である人気を直接的に問う項目には，自己評定で答えることの難しさが想定されるだろう。欧米における人気研究の分野では，「ソシオメトリック・テスト」と呼ばれる他者評定式の研究手法で回答が求められてきたものの，国内では倫理的な問題が指摘されて以降，実施困難となっている（石田，2002）。そこで本研究では，自己を取り巻く物質的，社会的な資源獲得において，他者への攻撃的な振る舞いを含む威圧的戦略と，他者への思いやり的な振る舞いを含む向社会的戦略の 2 つの戦略によって，個人をそれぞれのタイプに弁別する資源コントロール理論（Hawley，2003）の考え方に基づき，攻撃行動と向社会的行動という個人の行動特性によって，学級内地位を捉える着想に至った。

２．研究の目的

上記を踏まえて，本研究では，（１）学級における個人の行動特性であり，かつ複数項目によって実証的な尺度作成がなされている攻撃行動と向社会的行動を用いて，認識的な人気とソシオメトリック人気，いじめとの関連を検討することを目的とする。具体的には，攻撃行動と向社会的行動の組み合わせによって，認識的な人気とソシオメトリック人気，いじめとの関連が異なるかを比較する。

続いて，本研究では，（２）攻撃行動と向社会的行動を，学級にもたらす影響の大きさの指標として捉え，学級風土とどのような関連を持つかを明らかにすることで，学級風土の形成過程を検討することを目的とする。具体的には，時点ごとの攻撃行動と向社会的行動と，学級風土との関連を明らかにする。

３．研究の方法

学校長または教頭より調査協力を得られた中学校 4 校の 1-3 年生 1213 名を対象に，1 時点目を 2023 年 9-10 月，2 時点目を 2023 年 12 月，3 時点目を 2024 年 2-3 月として，短期縦断的なアンケート調査を実施した。3 時点とも協力を得られたのは 2 校であり，1 校は 1 時点目と 2 時点目，1 校は 1 時点目と 3 時点目に協力を得られた。調査実施にあたって，アンケートへの回答が任意であること，答えたくない場合は途中で回答を辞めてよいこと，得られたデータは匿名化され，研究目的以外に使用されることはないことなどがアンケートの冒頭に記載された。また，アンケートの冒頭に記載したものと同じ文面を担任に配布し，実施前に生徒への説明を行うよう依頼を行った。なお，本アンケート調査は，筆者が所属している大学の倫理審査専門委員会の承認を受けた。

調査内容として，全時点において，中学生用攻撃行動尺度（高橋・佐藤・野口・永作・嶋田，2009），対象別の向社会的行動尺度（村上・西村・櫻井茂男，2016）の下位尺度である友だちに対する向社会的行動を抜粋，新版中学生用学級風土尺度（伊藤・宇佐美，2017）の下位尺度であるリーダー，学級満足感を抜粋し，肯定的な学級風土としたほか，学校適応感尺度（小杉，2014），認識的な人気に関する複数項目（例：「私はクラスで中心的な存在だと思う」），ソシオメトリッ

クな人気に関する複数項目（例：「私はクラスで受け入れられている存在だと思う」），学級内のいじめに関する複数項目（例：「誰かが誰かを仲間はずれにしたり，無視したり，陰で悪口を言ったりすることが起きている」）を使用した。

４．研究成果

はじめに，研究目的（１）において，1 時点目（以下，T1 時点）から 3 時点目（以下，T3 時点）のそれぞれに時点について，攻撃行動尺度の得点と向社会的行動尺度の平均値を基準に，それぞれ高群，低群を作成した。続いて，その組み合わせによって，各時点ごとに，①両高群（攻撃行動と向社会的行動の両方が平均値以上），②攻撃高群（攻撃行動が平均値以上），③向社会高群（向社会的行動が平均値以上），④両低群（攻撃行動と向社会的行動が平均値よりも低い）の 4 群に分類した。各時点の 4 群について，同時点における認識された人気，ソシオメトリック人気，いじめの平均値の比較を行った。T1 時点-T3 時点の認識された人気では，各時点における，①両高群が最も高い結果となった。続いて，T1 時点-T3 時点ソシオメトリック人気では，各時点における，①向社会的高群が最も高い結果となった。学級内のいじめでは，T1 時点と T2 時点においては，①両高群が最も高く，T3 時点では，②攻撃高群が最も高い結果となった。このことから，欧米において議論されていた認識された人気とソシオメトリック人気について，攻撃行動と向社会的行動の組みわせによってその違いが捉えられることが示された。とりわけ，学級内のいじめへの評定に関しては，T1 時点と T2 時点において，両高群が他の群よりも高かったことから，認識された人気を持つ生徒たちが学級内におけるいじめの実態を最も把握している可能性が示唆された。

また，攻撃行動と向社会的行動はともに，ある程度一貫してみられる個人の行動特性として捉えられていることから，T1 時点で作成された 4 群をもとに，T1 時点以降の各時点のそれぞれの変数について，平均値の比較を行った。まず，認識された人気では，T1-T2 時点においては，①両高群が最も高く，T3 時点では，③向社会高群が高い結果となった。ソシオメトリック人気では，T1-T3 時点を通して，③向社会高群が最も高く，学級内のいじめでは T1 時点から T3 時点を通して，①両高群が最も高い結果となった。このように，各時点ごとに 4 群に分類して検討した結果と概ね一致したものの，T3 時点における認識された人気については，③向社会高群が最も高くなるという異なる結果が認められた。認識された人気とソシオメトリック人気は重なり合う概念でもあると従来指摘されていること，T3 時点が年度末という学級が成熟した状態とされる時期であることを考えると，学級集団における時間の経過に伴って，両概念が重なりやすくなる可能性が示された。

研究目的（２）について，肯定的な学級風土，攻撃行動，向社会的行動の相関分析の結果を Table1 に示した。

Table 1. 肯定的な学級風土，攻撃行動，向社会的行動の相関係数

	1	2	3	4	5	6	7	8	9
1. 肯定的な学級風土（Time1:T1）									
2. 攻撃行動（T1）	-.16 **								
3. 向社会的行動（T1）	.34 **	-.18 **							
4. 肯定的な学級風土（Time2:T2）	.47 **	-.12 **	.26 **						
5. 攻撃行動（T2）	-.06	.65 **	-.16 **	-.09 *					
6. 向社会的行動（T2）	.24 **	-.10 *	.71 **	.32 **	-.09 *				
7. 肯定的な学級風土（Time3:T3）	.48 **	-.13 **	.35 **	.47 **	.05	.25 **			
8. 攻撃行動（T3）	-.12 *	.70 **	-.16 **	-.19 **	.70 **	.00	-.15 **		
9. 向社会的行動（T3）	.29 **	-.04	.68 **	.24 **	-.02	.71 **	.42 **	-.10 *	

*p<.05 **p<.01

まず，各時点における同じ変数間の関連について，T1 時点の肯定的な学級風土と，T2 時点，T3 時点の肯定的な学級風土との間に中程度の有意な正の相関が示された。また，T1 時点の攻撃行動は T2 時点，T3 時点の攻撃行動と，T1 時点の向社会的行動は T2 時点，T3 時点の向社会的行動と有意な正の相関が示された。

続いて，各時点における異なる変数間の関連について，T1 時点の攻撃行動と，T1-T3 時点の肯定的な学級風土との間には，有意な負の相関が示された。なお，T1 時点の攻撃行動と，T1-T3 時点の向社会的行動と間では，T1-T2 時点では有意な負の相関が示されたが，T3 時点では有意な関連は見られなかった。T1 時点の攻撃行動は，その後の肯定的な学級風土との間では一貫して負の関連を示したものの，向社会的行動との間においてはその傾向が見られなかったことが明らかとなった。また，T1 時点の向社会的行動は，T1-T3 時点の攻撃行動と間で有意な負の相

関，T1-T3 時点の肯定的な学級風土との間で有意な正の相関が示された。特に，T1 時点の向社会的行動は，T2 時点よりも T3 時点の肯定的な学級風土において強い相関が見られた。以上より，攻撃行動は肯定的な学級風土と一貫して負の関連を，向社会的行動は肯定的な学級風土と一貫して正の関連を持つことが示されたほか，向社会的行動は T2 時点よりも T3 時点の肯定的な学級風土との関連が強くみられたことから，学級でみられる思いやり的な行動は，その後のポジティブな学級風土に影響することが考えられる。

今後の課題としては，まず，収集した 3 時点のデータについて，期間内の公表に至らなかった部分の分析および公表が挙げられる。また，今回収集した 1 時点目が，夏休みが明けた 9-10 月であったため，今後は，学級編成直後の夏休み前までに 1 時点目を収集し，縦断的な検討を行うことが望まれる。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計0件

〔学会発表〕　計2件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 唐音啓
２．発表標題 中学生における攻撃行動と学校適応感との関連
３．学会等名 日本発達心理学会第35回大会
４．発表年 2024年

１．発表者名 唐音啓
２．発表標題 学校適応はどのようにとらえられるのか　集団に注目した新たな研究の展開
３．学会等名 日本教育心理学会第66回総会
４．発表年 2024年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関